

「すぐにやれる!」「うまくいくかも!」～はじめよう!授業DX研修会の感想から～

ICTを活用した授業改善を目指して～はじめよう!授業DX研修会～

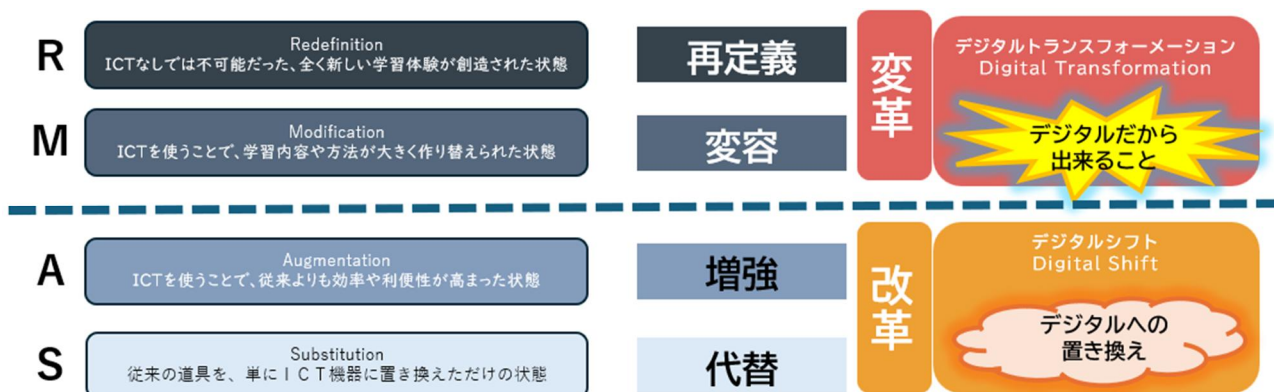
今年度、宮城県総合教育センターでは情報教育に関する研修「はじめよう!授業DX研修会」を行いました。研修は、県内の教員によるICTを活用した授業の実践発表、センター指導主事による授業DXを意識した授業づくりの講義の他、それらを踏まえ、単なるICT活用にとどまらない「一人一台端末環境を生かした、デジタルだからこそできる授業改善」についてグループ検討を行いました。グループ検討では、グループでの対話を通じ、これまでの授業を振り返りながら、授業DXを具現化するための構想を練る時間となりました。



図 研修会の様子

授業DXってなんだろう～SAMRモデル～

ところで、授業DXとはなんでしょう?ここでは、SAMRモデルを使って、説明したいと思います。SAMRモデルとは、Ruben R. Puentedura (2010) が提唱した「教育におけるICT活用の習熟度」を評価・分類するためのフレームワークです。ICT活用の習熟度を「ICTを使うことで学習体験がどう変化したか」という視点で、Substitution (代替)、Augmentation (増強)、Modification (変容)、Redefinition (再定義) の順に分類しており、これらの頭文字を取ってSAMRモデルとされています。



Substitution (代替)、Augmentation (増強) は、これまでの授業をICTで置き換える段階とされ、Modification (変容)、Redefinition (再定義) の段階になり、はじめてICTの置き換えではなく、デジタルだからこそできる授業に変革する (DX=デジタルトランスフォーメーション) 段階となります。授業DXとは、単にICT機器を導入することではないのです。ICTを有効活用することで、これまでの授業ではできなかったことを実現するのが、授業DXです。

ICT活用から授業DXへ!

受講者の先生方の感想からも単なるICT活用から一歩踏み込み、その先にある「授業DX」へと視点を広げることが、新たな授業改善の視点につながったことがわかりました。

<受講者の感想(一部抜粋)>

- 授業DXに向けて、ハードルが高いイメージがありました。しかし、授業改善策は先生方のアイデアからすぐにも取り入れられるものがあると気付くことができました。
- 実践発表や講義、演習を経て、日頃の授業について見直すことができました。特に、I C Tを使うことで初めてできる授業とI C Tを使わなくてもできる授業を分けて、考える機会となりました。
- 「I C Tを活用する＝授業DX」ではないということがよく分かりました。今日学んだことを少しずつ自分の授業で取り入れていくとともに、同僚にも伝えていくことで、組織的な変化を促したいです。
- 今まで諦めていた・うまくいかなかった授業を振り返ることで、I C Tを使えばうまくいくかもしれない!という希望を見いだすことができました。
- 普段は生徒に「1分ね!」と気軽に言っていたのですが、いざ自分が1分の動画をつくってみると、難しかったです。

すぐにできる!? 授業DXにチャレンジ!

これまで宮城県総合教育センターの研修会等で紹介している授業DXの例のうち、先生方から好評を得ているものをいくつか紹介します。これらを参考に授業DXにチャレンジしてみてください!

1分間動画にまとめさせよう!

概要	学習した単元の内容のまとめや調査した内容等を1分間の動画でまとめさせる。
効果	○ 1分間という制限の中で、学習した内容が伝わるように動画をまとめるためには、内容を精査し、取捨選択したり、言葉を選んだりする必要があります。このことが、改めて学習内容を深めることにつながります。 ○ これまでの45分や50分の授業では難しかった一人一人が発表する機会を確保できます。
ポイント	○ 動画の作成と考えるとハードルが高く感じますが、作成方法を制限しないことがポイントです。例えば、カメラ機能を使って1分間で説明しても良いでしょうし、プレゼンソフトや動画編集ソフトを使って動画を作成しても良いでしょう。児童生徒は、案外、上手に動画を作成しますし、周りの様子を見ながら、だんだん動画の作成が上手になります。 ○ 派手な動画等に迷わされず、説明が良いか悪いかを見極めながら、お互いの動画を評価する授業を展開することで、学びをさらに深めることもできます。

作業過程をみんなで共有しよう! <他者参照>

概要	「スライド」をクラスで共有して、他の様子を確認しつつ、授業のまとめを各自で作成できます。
効果	○ 児童生徒間で進捗を見合うことができ、それぞれの段階で困っているとき参考にすることができします。 ○ 互いの良い部分を見合うことができます。
ポイント	○ 見合うことができると聞くと、カンニングやコピーが想起されて負のイメージを抱いてしまいがちですが、方針が立てられなかったり、手が止まったりしているよりは児童生徒たちが動き始めることができます。 ○ どうすればもっと良くなるかという視点で考えさせることがより深め合うためのポイントです。

(編集後記) 授業改善の手立てにICTを加えるとこれまでできなかったアプローチに手が届きます。DXという何だかよく分からない、どうにもできないものをイメージしてしまいがちですが、子供たちの順応が意外と早いので、操作にしろ使い方にしろ授業に組み込むことで理解が進むかもしれません。

[第47号担当 山岸]